

和漢薬の来歴に関する新史料

小曾戸 洋

本日は日本薬史学会・日本獣医史学会の合同会であるから、薬史学にも通ずる標記のごとき演題を選んだ。また獣医史学にまつわる事項も加えた。

医療の中でも薬のもつ意義はきわめて大きい、古来、医療の中心は薬物療法であったといっても過言ではなからう。中国そして日本で従来用いられてきた和漢薬の来歴については、『日本薬局方』収載品の生薬に関しては『日本薬局方解説』に來歴の項を設けて解説がしてあるが、文献学的・史料学的な観点から配慮に欠けるきらいがある。この数十年來、中国でも日本でも伝統薬物に関連する考古学的発見が相次いだ。たとえば中国では一九七〇年代の馬王堆医書や武威医簡などの出土、日本では一九六〇年代、一九八〇年代の藤原宮薬物木簡の出土などである。これらは従來の伝世資料をはるかにさかのぼる一次資料であり、薬物の來歴に関する確実な情報を提供してくれるかけがえのない史料である。このようにその情報は一変したというのに、それによる知見・成果はいささかも反映されておらず、いまだに『神農本草經』や正倉院薬物などに終始しているのは残念といわざるをえない。そこで本日合同学会を機に、これら史料の一端を紹介するこ

とにした。

一九七二年から七四年初にかけて中国湖南省長沙の馬王堆漢墓、一〜三号墓が発掘調査された。一号墓からは前漢、今から二一七〇年前の婦人の死後直後かと思われるほど生々しい遺体が発見された。病理解剖が行われ、種々の病歴が判明。手には死後なお服用すべく副葬された生薬が握られており、鑑定の結果、桂皮・高良薑・薑・蒿本・杜衡・茅香・花椒・辛夷・佩蘭であると同定された。

三号墓からは二千二百年前の医学書類、一四種が出土した。多くは絹に書かれた帛書である。薬物に関するものとしては『五十二病方』（仮称）が最大で、およそ一万字から成る処方集である。五二種の病氣に対し、二七〇あまりの処方が記され、二四三種の薬物が用いられ、灸法や呪法も併用されている。演者らは数年來この書の書誌学的研究、翻字訳注研究に取り組んできたが、その結果、この書は各々一六の帛、二枚（計三二頁のうち『五十二病方』は二七頁を占める）に書かれたものであることが判明。この書誌学的事実から従來の研究を越える結果を得ることができた。中国の研究者はいまだにこの事実を認識するに至っていない。

『五十二病方』の処方の一例を紹介する。「唯（疽）病、冶白竅・黄著・芍薬・桂・薑・椒・朱史、凡七物、骨脂倍白竅、肉脂倍黄著、腎脂倍芍薬、其餘各一、并以三指大最、一入椀酒中、日五六飲之……」

別の馬王堆帛書『養生方』に載る処方の例も紹介する。……

取細辛・乾樞・菌桂・烏喙・凡四物・各治之・細辛四・乾樞・菌・烏喙、各……。……後飯、益氣、有(又)令人免(面)沢。「……取白符・紅符・伏零、各二兩、樞十果、桂三尺、皆各治之、以美醢二斗……」。

一九七二年に甘肅省武威県旱灘坡漢墓から出土した『武威医簡』は後漢前期、一世紀の木簡・木牘である。種々の病症に對し、三〇ばかりの処方記され、約百種の薬物が用いられている(針灸療法もある)。一例を挙げる。「治久效上気喉中如百虫鳴状卅歲以上方、苳胡・桔梗・蜀椒、各二分・桂・烏喙・薑、各一分、凡六物・治合和丸、以白密大嬰桃、昼夜吟三丸消、咽其汁、尤良」。

ほかにも一〜二世紀の薬方を示す出土史料は少なからずある。「敦煌漢簡」の一例を示す。「傷寒四物・烏喙十分・細辛六分・朮十分・桂四分、以温湯飲一刀切、日三、夜再行、解不出汗」。

「居延漢簡」から獣医に関する処方例を挙げる。「治馬傷水方、薑・桂・細辛・皂莢・付子、各三分、遠志五分、桔梗五分、□子十五枚」。「治馬膏方、石南草五分……」。「治馬膏方、石方……」。「膏」は馬の背、鞍部分の褥瘡か。「治薬、以和膏、炊令沸、塗牛領良」。

日本の出土資料にも言及しよう。藤原宮(六九四〜七一〇)跡からは多くの薬物関係木簡が出土している。これらは大室令施行下のものであり、七世紀末の日本の実情を示すものとみてよい。時代的には飛鳥時代に属するものであり、奈良時

代の正倉院資料を半世紀はさかのぼる資料である。荷札・付札類には、麻黄・麻子・麦門冬・薯蓣・龍骨・大黃・商陸・松羅・榆皮・芎藭・当歸・烏頭・桔梗・人參・五茄・懼麦・夜干・大戟・蛇床子・蛇脫皮・地黄・白朮・独活・葛根・非子・知母・牛漆・杜仲・桃人・黑石英・石流黄などの薬物名が見え、処方書や薬物請求受領書の類にはこのほか、漏盧・升麻・黄芩・枳实・白僉・白微・芍薬・甘草・兔糸子・石斛・白芷・白銀・桂心・茯苓・車前子・西辛・久參・王風行・防風などの薬物が書かれており、これらが実際に使用されていたことがわかる。

正倉院薬物以外にも法隆寺伝来(東京国立博物館所蔵法隆寺献納宝物)の薬物があり、七〜八世紀の国際交易の世界的広がりを示す遺品がある。

現行『神農本草経』はかなり時代の降る資料から復元されたもので、その文字がいかにほど漢代の真を伝えているかには疑問が多い。現伝の『傷寒論』『金匱要略』もまた書誌学的には宋代をさかのぼりえぬ資料で、必ずしも漢代のものとは認めがたい。ところが上述の出土資料は当時の現物であり、当時そのような名称の薬物が実際に使用されていたことを示す動かぬ証拠である。『日本薬局方解説』の生薬の来歴の記載は、今後、これらの新出史料の存在を考慮し、是正されることが望まれる。

(平成十四年十二月例会)